

発達障害児の在籍する通常学級における 児童の学級適応に関する研究

～ユニバーサルデザインによる授業づくりを通して～

○¹ 曾山和彦・² 堅田明義

(¹名城大学大学院大学・学校づくり研究科・²中部学院大学人間福祉学部)

KEY WORDS : 発達障害 ユニバーサルデザイン 学級適応

【問題と目的】

発達障害児の在籍する通常学級における「ユニバーサルデザイン」の視点に基づく学級づくり・授業づくりの実践が増えてきている。ユニバーサルとは「普遍的」という意味であり、「個への支援が全体への支援にもつながる」ということである。深沢 (2007) は学級状態を把握する心理尺度 Q-U (河村, 1999) を用い、発達障害児 (疑いのある児童含む) の在籍する小学校高学年 127 学級 3694 人を分析し、「学級状態が良好であれば発達障害児の適応もよい」という結果を明らかにした。曾山・堅田 (2010) も、小学校高学年 6 学級 160 人を分析し、深沢の知見同様の結果を報告した。子どもたちが学級を「居場所」と捉えれば、そこは学習指導も生徒指導も機能する「学びの場」、すなわち教育力のある場所となろう。学級を「居場所」とするためには、日々の学級づくり、授業づくり等、様々な方面からの働きかけが考えられる。本研究では、これまでに比較的、学会等における報告が少ない「ユニバーサルデザインによる授業づくり」に焦点を当て、学級児童及び抽出児童の学級満足度の変容を考察・整理した。

【方法】

対象：公立小学校 6 年生 A 学級 37 名 (男子 17 名、女子 20 名)。抽出児童は、コミュニケーションに弱さが見られ、班活動時にトラブルが多い男子児童。

手続き：A 学級では発達障害児の在籍する通常学級における特別支援教育の推進に向け、ユニバーサルデザインによる授業づくりを展開した。具体的には「ユニットとルーティンのある授業」として次のように進めた (Table1)。また、抽出児童に対しては、座席を教師の前に置き、常に支援の手が届く物理的な学習環境を作った。また、班には抽出児童と比較的スムーズにかかわることのできる児童をメンバーとして配した。

Table 1 ユニットとルーティンのある授業の定義及び具体例

<定義>

- ①学習のねらいが、子どもたちに明確に提示され、そのねらいの達成に向けた様々な学習「ユニット」が計画的に展開されていること
- ② 45 分のなかにあるそれぞれの「ユニット」には、小さなねらいが設定されており、「ユニット」ごとのねらいを達成させながら、学習のねらいに迫っていきけること
- ③それぞれの「ユニット」を組み合わせたものが、「ルーティン」(決まった手順)である。「ルーティン」を提示することは、学び方を提示することである。

<具体例>

- ①国語；言葉→課題提示→読み取る→考える→振り返る
- ②算数；計算→課題提示→問題 (個人) (集団) →練習→発展

調査；Q-U を同一児童に 2 回実施。所要時間は各 15 分。

時期；2010 年 5 月及び 12 月

測定具；Q-U の「学級満足度尺度」を用いた。学級満足度尺度は被侵害得点と承認得点の 2 軸により、児童の学級生活に対する満足度を測定する自己評定式の尺度である。

【結果】

1. Q-U 結果；A 学級児童の学級満足度の変容を t 検定により検討した。その結果、承認得点 (両側検定： $t(36) =$

1.05)、被侵害得点 (両側検定： $t(36) = .00$) 共に、5 月から 12 月にかけて有意な変容は認められなかった (Table2)。

	N	5月	12月	t値
承認得点	37	19.73(3.12)	20.22(2.28)	1.05n.s
被侵害得点	37	8.76(3.47)	8.76(2.87)	.00n.s

() 内は標準偏差

また、A 学級児童及び全国平均得点を比較した (Fig. 1)。結果から 5 月、12 月共に A 学級児童は全国平均に比べ、承認感、安心感を高く感じていることが明らかになった。抽出児童については、5 月から 12 月にかけて承認得点 (12→19)、被侵害得点 (20→16) が共にプラス変容を示した。

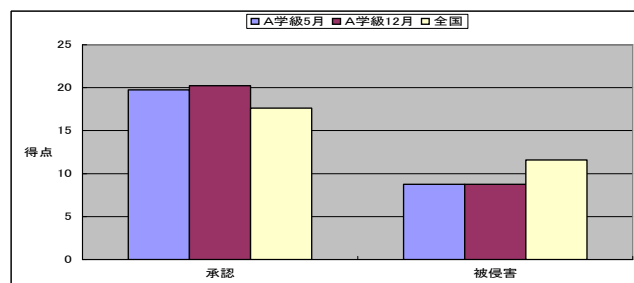


Fig.1 A 学級児童及び全国平均得点の比較

2. 担任の行動観察；学級全体としては、児童が授業の流れを自分たちで作ることができるようになった。班活動を通して、児童はスムーズな話し合い活動ができるようになった。抽出児童については、班活動のルールを守ることができるようになり、かんしゃくを起こすことが少なくなった。班メンバーとスムーズにかかわることができるようになり、承認感が高まった。

【考察】

結果から、発達障害児の特性に配慮した「ユニットとルーティンのある授業」は、抽出児童の承認感、安心感の向上につながることを示唆された。また、集中力が持続するよう学習内容を小さなねらいごとに分割した「ユニット」と、見通しをもって学習に取り組みめるよう決まった手順で進める「ルーティン」は、抽出児童のみならず全児童に奏功することが、全国平均を上回る満足度の維持に示されたと考えられる。ユニバーサルデザインによる授業は、障害特性を考慮した場合、本研究の「ユニットとルーティン」以外にも様々な考えられよう。今後の課題としたい。

【参考文献】

- ・河村茂雄 1999 楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U 実施・解釈ハンドブック 図書文化
- ・深沢和彦 2007 特別支援対象児の学級適応感と学級状態との関連 「特別支援教育を進める学校システム」(河村茂雄編) 図書文化
- ・曾山和彦・堅田明義 2010 小学校通常学級における特別支援教育の実践研究～学級満足度を高める授業づくり・集団づくりの試み～ 日本特殊教育学会第 48 回大会論文集 512 (SOYAMA Kazuhiko, KATADA Akiyoshi)